

複合動詞「打ち～」の意味用法の記述 —本動詞「打つ」と関連付けて—

李 淼*

Description of the Meaning of the Compound Verb "Uchi～" in Its Various
Uses: The Relationship between "Utsu" as a Proper Verb

Miao Li*

Received December 5, 2013

Abstract

In this paper, I summarized the usages of " Utsu " at the first place, and then an attempt was made to describe the different meanings of the compound verb " Uchi " from its various usages. When it comes to the different meanings of the prefix " Uchi ", it is always found to be having a relationship with the verb " Utsu " and also influenced by the meanings of the following verb. Further, in the case of " Utsu " is used by being as a lexical compound verb, the ambiguity is eliminated and when it is interpreted by the basic meaning it becomes to be possible to analyze the meaning of that word. Further, at first sight, being one that is one word of what has nothing to do with the meaning of " Utsu ". But, it is intended to be a foundation of the meaning of that word, and also limit the meaning of it. In this way, no matter what usages of the word, as a prefix, or as a lexical compound verb, or as one that is one word, we can find a continuation of the word from a pure simple verb to a compound verb.

1. はじめに

日本語において、多義動詞がたくさん存在し、その語義間の関係がかなり複雑である。それに、動詞の生産性も非常に高い。「動詞の連用形+動詞の基本形」(下記では、V1+V2 とする)という組み合わせから成り立つ複合動詞はその一例である。複合動詞は多くの種類と複雑な形を持ち、多数の意味と変化に富んでいる。本稿は本動詞の意味用法と関連付け、複合動詞の意味を記述するのを目的とする。本稿では、動詞から新たな動詞を形成する接辞付加や複合について、「打つ」と「打ち～」を例として取り上げ、「打ち～」の意味において、「打つ」がどのように働き、そして拡張・変更されているのかを考察する。また、複合動詞「打ち～」は「打つ」とどう関係しているのかを究明する。

*国際交流センター (大連外国語大学交流教員) International Exchange Center

以下、2. では先行研究の論述を踏まえ、多義動詞「打つ」の多義性及び諸用法を整理する。3. では複合動詞「打ち～」を接頭辞的な用法の「打ち～」、語彙的複合動詞「打ち～」、そして一語化したものの三つに大別し、「打つ」の意味に関連付けつつ、それぞれの意味用法を記述する。なお、考察に用いるデータは辞典やコーパス¹⁾から採集した用例である。4. は本稿のまとめである。

2. 「打つ」の多義性

打撃動詞「打つ」は多義性に富み、複数の意味用法を持っている。「打つ」は活動の主体である人間が手や道具などを対象に当て、それに衝撃を与えることを表わす行為である。また、打つ動作には＜瞬間的・勢いよく・強度のある力を加える＞といった要素が含まれている（李 2013：79）。李（2013）は「打つ」の諸用法を分析し、「製作・傷害・挿入・移動・定置・放出」の六つに分類しようと示している。板東（2009）では、「打つ」の多義は共起する名詞句との組み合わせによって生じていると指摘している。また、「打つ」の多義派生の分かれ目となる概念を行為の意図性の有無、行為の種類、行為の結果まで含意するかどうかの三点に分けられる（2009：172）。

上記の先行研究を踏まえ、ここでは、打つ行為からうかがえる行為の動機もしくは結果に基づき、名詞と共起する具体例を示しながら、「打つ」の諸用法を表1のように整理してみる。

表1

1.製作：刀を打つ	2.築造：土台を打つ	3.耕す：田を打つ
4.傷害：頬を打つ	5.負傷：頭を打つ	6.挿入：釘を打つ
7.固定：杭を打つ	8.縛る：縄を打つ	9.興行：芝居を打つ
10.注入：コンクリートを打つ	11.記入：句点を打つ	12.刺入：串を打つ
13.注射：注射を打つ	14.刺激：鼻を打つ	15.感動：心を打つ
16.移動：ボールを打つ	17.投擲：つぶてを打つ	18.投げ倒す：上手投げを打つ
19.支弁：手金を打つ	20.回転：とんぼ返りを打つ	21.定置：碁を打つ
22.博打：マージャンを打つ	23.放出：太鼓を打つ	24.発信：メールを打つ
25.火・光沢などの発出： つやを打つ	26.宣伝：広告を打つ	27.指摘：非を打つ

では、V2 と結合した複合動詞「打ち～」において、前項動詞「打つ」は意味上合成語にどう貢献しているのであろうか。また、複合動詞「打ち～」の意味に対する理解を深めるには、「打つ」の意味をどう捉えたらいいのかについて次節で考察を試みる。

3. 複合動詞「打ち～」の意味用法

複合動詞に関する研究が多く行われてきた。代表的なものとして、石井（2007）、影山（1993）姫野（1999）、松本（1998）、由本（2005a、b）、松田（2004）などが挙げられる。そのうち、複合動詞は V1 と V2 との意味関係から分類される説の中、影山（1993）の指摘が注目されている。影山（1993）では、複合動詞の構成要素の意味関係により、語彙的複合動詞と統語的複

合動詞の二種類に分けている。また、姫野（1999）は多数の統語的複合動詞の語例を挙げ、それらの意味用法を記述している。さらに、松田（2004）では、意味的側面に着目した複合動詞研究の課題を提示している。すなわち、類義語との意味的差異、意味的派生のプロセス、そして、多義の後項動詞の意味・用法の三つである。それから、「～込む」の意味を記述した上、その結果を習得研究や辞書開発に応用した。（2004：22）。

統語的複合動詞と比べ、語彙的複合動詞の分析にあまり関心が寄せられていない。先行研究には松本（1998）、由本（2005a）などがあるが、複合動詞の後項ほど前項が注目されない。その理由には、語彙的複合動詞は語例が多いこと、規則性を見出しにくいことなどがあると考えられるが、だからこそ研究の価値があると思える。『大辞林』（第三版）においての動詞「打ち～」の見出し語数は104語²⁾である。これだけの数の語の意味を記述するには無理があるため、本稿では、それらを下記の三種類に分け、代表的な語例を挙げつつ検討していくことにする。

- (1) ①接頭辞（prefix）的な用法（pV型）
②語彙的複合動詞「打ち～」（VV型）
③一語化したもの（V型）

本稿では、研究対象とする複合動詞「打ち～」は『大辞林』（第三版）から収集した語である。語例の中には、多義語も多数あるし、(1)のうちの二つ以上の用法を兼ねた語も少なくないので、考察の際は、必要に応じて、どちらかの用法を取り出し、記述することにする。また、「打ち～」の語例を(1)のどちらに分類するかを判定する際、辞書の記述や実例の考察のほか、データベース「複合動詞レキシコン」³⁾を参考にする。

3-1. 接頭辞「打ち～」

石井（2007：72、113）では、前項が語彙的な接頭辞として後項の表わす運動の様態面を形式的に限定する（強意等の意味を添える）という構造を「語彙接頭辞構造」⁴⁾と呼ぶ。語例を見渡すと、接頭辞「打ち」を付けると動詞全体の語意の変化は生じないが、後に来る動詞を強めたりする働きがあるとわかった。つまり、接頭辞の「打ち」が副詞的な機能を持っていると言える。では、接頭辞の「打ち」はどのように機能しているのだろうか。また、本動詞「打つ」の意味用法に関連付けたら、分析できるのだろうか。本節ではこれらの問題を究明する。

『大辞林』（第三版）では、接頭辞「打ち～」の用法を(2)の四つに示している。本稿では、(2)の①と②を合わせて、「副詞的な用法」と名付けて論じることにする。また、(2)の③に関しては、具体の語例を挙げ、V2の意味用法と比較しながら検討する。(2)の④については意味論的な考察はできないので、研究対象から外すことにする。

- (2) ① 下の動詞の意を強める。
② 下の動詞の意を軽くする。
③ 下の動詞の意味を抽象化する。
④ 語調をととのえる。

まず、接頭辞「打ち」の副詞的な用法について考察する。(3)のような勢いよく行動する様態が接頭辞「打ち」で表現できる。(3a)の材木、玉石を上の方から下ろす行為を接頭辞「打ち」で強めて言う。また、「打ち開く」が勢いよく、大きく開くという意味であり、(3b)はその抽象領域に用いられるメタファー的な用法である。「打ち当てる」、「打ち破る」、「打ち払う」などもこの種類の語例である。

- (3) a. 烏竜嶺のふもとまでたどりつきますと、上からは材木、玉石を打ちおろして来ますので、前進できず、手の打ちようがありません。 （清水茂訳『水滸伝』1996）

- b. 思えばわが国において、宗教、文学、芸術、いや学問までもが、一つの新しい世界を打ち開くとき、その先達となった人たちは必ずと言ってよいほど、旅の中にその人生を送っているのである。 (『日本美術の演出者』1990)

板東 (2009 : 160)、李 (2013 : 79) が示しているように、「打つ」は対象に瞬間的に強度のある力を加える行動である。「打ち下ろす」、「打ち開く」などには「対象に打撃を与える」という行為がそれほど目立たないが、対象に勢いよく作用する様態は「打つ」行為そのものの様態と共通性を持っていると言えよう。

また、(4) の「打ち揃える」から見えるように、接頭辞「打ち」は副詞「きちんと」に相当し、V2 動作の状態を意味的に限定している。「打ち揃える」と同じ性格を持っている語例がたくさん挙げられる。多くの場合、「打ち寛ぐ」、「打ち立てる」、「打ち出す」、「打ち驚く」、「打ち忘れる」における接頭辞「打ち」がそれぞれ副詞の「ゆつたり」、「しっかり」、「はつきり」、「さっと」、「すっきり」と対応できる。このように、接頭辞「打ち」と合わせることで、後項動詞の意味が限定された。それに、特定の動詞と結合したからこそ、接頭辞「打ち」が含意するこれらの意味が生まれたと考える。つまり、接頭辞と後項動詞が相互に依存する傾向が見られるのである。

- (4) 北からやって来た何十万羽ものホシムクドリが打ち揃ってアフリカ大陸沿岸に向けて出発するのに備えて集結しているというのである。 (『パロマー』2001)

さらに、(3、4) のような行為の様態、状態のほか、接頭辞「打ち」は行為の頻度を表わす副詞的な働きも持っている。(5a) は波が重なり合うように寄せてくるのを描いている。(5b) の「打ち重なる」は「最近是不幸が打ち重なった」と同様、反復の意味を添えている。(5c) の「打ち振る」は強く何度も振ることを指す。(5d) は不況とインフレが途切れることなく、四年間という長時間続く意味である。(5) における接頭辞「打ち」のいずれも行為の繰り返される度合いが高いことを表わすものである。

- (5) a. 砂に埋もれた岩に打ち寄せた波が、ホワイトゥオーターとなって夕日の色とまじり合う。 (『四季の写真』2003年8/9月号(第9巻第4号、通巻51号))
b. 打ち重なって散る花びら (『大辞林』第三版)
c. 日の丸の小旗を打ち振る熱狂的な応援が目に入れば「日本国民の代表として責任を果たさねば」とせかされるものです。それはもう善し悪しを越え、五輪選手の「任務」なんです。 (『君原健二聞き書きゴール無限』2002)
d. この四年間打ち続いた不況とインフレの中で、いま一番大きな問題というのは雇用の問題だと思うのです。 (第084回国会国会会議録1978)

また、接頭辞「打ち」には行為の程度を添える機能がある。面白いことに、程度を表わす用法として「少し」の意味と「非常に」の意味をともに持っている。(6) の「打ち興じる」においての「打ち」ははなはだしいという程度を表わすものである。「打ち興じる」は心から興味を持ち、非常に面白いという意味である。ここでは、「打ち」は程度副詞「非常に」に相当する。

- (6) ヨーロッパの公園で、ダラダラといつ果てるともなくボール遊びに打ち興じている高齢者の姿を目撃したことがあろう。 (岩波書店編集部編『定年後』1999)

一方、「打ち聞く」、「打ち見る」、「打ち掛ける」においての「打ち」は「少し」の意味を添えて、下の動詞の意を軽くする働きを持っている。(7a) の「打ち見る」は相手の心をちょっと見ることを意味する。(7b) の「打ち掛ける」は下見板に水を少しずつ掛けてまわる様態を描いている。このように、(6) は程度を強めているのに対し、(7) は行為全体を軽くする機能を果たしている実例である。

- (7) a. 白布できりと坊主頭を巻き締め、足に長靴をうがって一心不乱、作務に没頭しつつある姿は、彼らの内心はどうあれ打ち見たところ、なかなか清々しく、凛々しくも

あった。(『オール讀物』(第 59 巻第 2 号、通巻 862 号))

- b. 「屋根で見物していずに、早くしてよう」と姉娘は梯子の先から催促した。屋根の水撒きの次ぎには、家廻りの下見板にバケツの水打掛けて廻った。

(瀧井孝作著『松島秋色』1999)

以上で、実例を挙げながら、接頭辞「打ち」の副詞的な用法を整理してきた。状態副詞的な用法であれ、程度副詞的な用法であれ、一見、本動詞「打つ」と関係がないようであるが、「打つ」の各意味用法を思えば、関連性がないわけではない。表 1 に示している「打つ」の諸用法を見渡すと、「打つ」でさまざまな目標達成のための行為が表現できるとわかった。それに、それらの行為を行うには、たくさんの付随要素が必要とされる。たとえば、「刀を打つ」には丁寧に、しっかりとしなければならない。「釘を打つ」には狙いをきちんと定めて、行動すべきである。「ボールを打つ」とき、ボールの飛ぶ速度やルートの正確さなどが求められる。「字を打つ」や「太鼓を打つ」などは同じ行動を反復的に行わなければならない。これらの表現に反映されている「打つ」の特性が(4~7)の接頭辞「打ち」からうかがえたのと同じだと見られた。

このように、接頭辞「打ち」の意味は、いずれも「打つ」の物理的な意味に含まれている特性から展開したものだと考えられる。また、接頭辞「打ち」の意味したものが、結合する語基に強く依存し、それと結合してはじめて、その意味が生まれるのである。まとめて言ってみれば、「打ち」という接頭辞の多様な意味は、「打つ」自体の意味に関連性を持っていつつ、結合する基体の意味の差異によって導かれることとなる。

もう一つ興味深いことに、「打ち」のような動詞から生まれた接頭辞には、手の動作に関わるものが多い。こういった接頭辞の用法が生じたメカニズムを解明することについての検討は別稿に譲ることにするが、ここでは、このような語例をいくつか挙げておく。「押し隠す」、「掻き消す」、「差し迫る」、「叩き売る」、「取り決める」、「引き締める」などである。

続いて、抽象化した用法の接頭辞「打ち」の考察に移る。まず、代表の語例として、「打ち明ける」の意味を検討する。『大辞林』(第三版)により、「打ち明ける」は「秘密や、心の中に思っていたことなどを、包み隠さず人に話す」ことを指すという。(8)はその実例である。

- (8) しかも法正は、劉備を益州の主人として迎えたいという真意を打ち明け、領内の兵器、食糧、人馬の数量、さらに詳細な地図まで提供した。

(『「三国志」のツボがわかる本』2005)

「打ち明ける」の前には、「愛、恋、思慕、苦しさ、悲しみ」などのような感覚・感情、そして「秘密、正体、真相、本音、病気」などのようなそもそも心の中に隠していたことを表わす表現が来る。では、「打ち明ける」においての「打ち」はどのような働きを持っているのだろうか。それを究明するには、「明ける」の意味を先に検討しなければならない。『大辞林』(第三版)では、「あける」について他動詞の用法を 11 種類、自動詞の用法を 3 種類挙げている。「あける」の表記には「開」、「明」、「空」の三つがある。基本義が「中のものが通り抜けられるように、閉じ込まれた容器を開く」と認定される。「あける」の多義のうち、「打ち明ける」と最も関連性が高いと思われるのは「閉じられた空間の中のもの、あるいは何らかのこと・もので詰められた空間などを片づけ、空の状態にすること」を意味するときである。この際、「明ける」の前に来るのは「穴、幕、年、扉、窓、口、目、道、蓋」などの具体名詞である。一方、先述したように、心の中のものを取り出して、目立たせるようにすることを表わす「打ち明ける」は抽象名詞と共起するのが一般的である。つまり、接頭辞「打ち」を添えることにより、語の意味を物理的な領域から抽象領域へと変更させることができる。

もう一つの語例を挙げて説明を加わる。(9)の「打ち消す」も「打ち明ける」と同じような接頭辞「打ち」の抽象化した用法の語例である。

- (9) 九兆円負担増の悪影響を打ち消し、消費不況を打開する道は、もはや消費税の減税しか

ありません。

(第 142 回国会会議録 1998)

「消す」の基本義として、「火/電気/黒板の字…を消す」のように目に見えているものをなくすることを意味する。また、その派生義に「不安感/気配/大根の辛み/汗のにおい…を消す」のように、心や耳・舌・鼻などで感じていたものをなくする意味もある。しかし、「打ち消す」は具体物をなくするのには使えない。「打ち消す」の目的語になるのは次のような語である。「考え、事実、言葉、噂、憶測、記憶、思い、心配、想像、疑い、罪悪感、嫉妬心、笑い」などである(『研究社日本語コロケーション辞典』による、一部略)。このように、意味的に類似した隣接語(語基)との差異や共起する語についての考察を通して、接頭辞「打ち」によっての具体領域から抽象領域への拡張が認定された。

以上で、接頭辞「打ち」の意味用法をまとめてきた。接頭辞「打ち」の副詞的な用法が変化に富み、V2 行為の様態、程度、頻度などを表わす語例が多く挙げられる。また、副詞的な用法であれ、抽象化した用法であれ、接頭辞としての「打ち」は「打つ」行為の動作性を失ったと言えるが、接頭辞「打ち」は「打つ」自体の意味に関連性を持っていつつ、結合する基体の意味の差異によって異なるニュアンスが導かれるとわかった。

3-2. 語彙的複合動詞「打ち～」

この節では、語彙的複合動詞の前項の「打ち」に目を向け、本動詞「打つ」との関連性を手掛かりにして、「打ち～」の語例を考察し、意味の記述を試みる。語彙的複合動詞の分類に関しては、影山(1993)では、語彙的複合動詞を前項と後項の意味関係により、「様態・付帯状況」、「手段」、「原因」「並列関係」、「補文関係」の五項目に分けて論じている。では、語彙的複合動詞「打ち～」においては、V1 と V2 はどういった関係をなしているのだろうか。また、影山(1993)は語彙的複合動詞の生産性は V2 に大きく依存し、さまざまな度合が見られると指摘しているが、V1 としての「打つ」は合成語にどう働きかけているかを究明してみる。

本稿では、『大辞林』(第三版)から収集した語彙的複合動詞のうちの表 2 に示す 20 語⁵⁾を対象にし、記述をおこなうことにする。その 20 語は表 2 のようである。

表 2

打ち上がる	打ち上げる	打ち落とす	打ち返す
打ちかかる	打ち勝つ	打ち砕く	打ち込む
打ち殺す	打ち壊す	打ち倒す	打ち出す
打ち付ける	打ち取る	打ち鳴らす	打ち抜く
打ちのめす	打ち負かす	打ち破る	打ち割る

『大辞林』の編集方針によれば、その意味記述の順序は現代語を先、古語を後にし、そして、一般的な語義を先、特殊な語義や専門的な語義を後に記述したという。ゆえに、『大辞林』の語義解説の第一義はその語の基本義と考えてよい。そこで、本稿では、語彙的複合動詞「打ち～」の意味を考察する際に、『大辞林』の記述に従い、他の辞書、辞典を補足的に参照することにする。

表 2 の語例の意味記述を観察すればわかるように、V2 は行為全体の目的あるいは結果を表わすものである。行為の目的・結果に当たる V2 が複合動詞全体の主要部になり、複合動詞の意味が V2 の素性が優先的に受け継がれる。しなしながら、V2 には行為の手段、すなわち、ど

のように目標を実現するかは含意しておらず、「打ち」を付加することによって意味が新たに生じると想定する。語彙的複合動詞「打ち～」においては、「打つ」の意味、とくに、基本義が生きていると考える。柴田他（2002：186-187）が示しているように、「打つ」は物を動かすことによって、何らかの結果をもたらそうという動機から出た行為である。語彙的複合動詞「打ち～」からもこういった特徴が見られる。単純動詞「打つ」に潜在している行為の目的は語彙的複合動詞の V2 により、明確に表現されている。また、「打ち～」行為は「打つ」とほぼ同様な結果をもたらすと考える。以下、行為の結果により、表 1 に参照しながら、(10) のように、表 2 の語を分類する。

- (10) a. 対象に打撃を与え、移動させる（打撃を受け、移動する）
 語例：打ち上げる（打ち上がる）、打ち落とす、打ち出す
 b. 相手に打撃を与え、傷害などを負わせ、勝利を求める
 語例：打ちかかる、打ち返す、打ち勝つ、打ち殺す、打ち倒す、打ち取る、
 打ちのめす、打ち負かす
 b'. 打撃を受け、負傷する
 語例：打ち付ける
 c. 対象に打撃を与え、挿入する
 語例：打ち込む
 c'. 対象に打撃を与え、貫通させる
 語例：打ち抜く
 d. 対象に打撃を与え、音を放出させる
 語例：打ち鳴らす
 e. 対象に打撃を与え、破壊する
 語例：打ち砕く、打ち壊す、打ち破る、打ち割る

(10b) と (10b')、(10c) と (10c') が意味上の隣接性を持っているため、同じグループにした。表 1 の「打つ」の諸用法と比較すればわかるように、「打ち～」の基本義を分析するには、「打つ」に対する理解が必要とされる。繰り返しになるが、単純動詞「打つ」の裏に潜んでいる行為の目的は語彙的複合動詞の V2 により、明確に表現されている。たとえば、「鐘を打つ」と「鐘を打ち鳴らす」は同じ行為を実行するのに見えるし、いずれも音の放出という結果をもたらすが、前者は行為そのものを描写するのに対し、後者は鐘を鳴らすために「打つ」行為を行うのを明示的に描いている。

続いて、語彙的複合動詞「打ち～」の各派生義に見られる単純動詞「打つ」との関連性について、いくつかの語例を考察し、記述を試みる。語例を選出する際に、(10) の分類や語の派生義の数などを配慮する。語義解説は『大辞林』（第三版）によるものである。

語例 1 「打ち出す」

- (11) ① 打って中の物を外へ出す。
 ② 打ちはじめる。
 ③ 金属塊や板金を槌で打ち延ばして成形し、器物を作る。また、裏からたたいて模様などを表す。
 ④ 主義主張や新しい考えなどをはっきり示す。
 ⑤ 興行の終わりを知らせる太鼓を打つ。

まず、(11) の②は「～出す」の統合的複合動詞の用法であるので、別扱いにする必要がある。(11) の①は「打ち出す」の基本義で、「大砲を打ち出す⁶⁾」のように、打撃を与えることで、内部のものを外部に出すのを指す。ここからさらに派生し、「打つ」の物を製造するという意味に焦点が当てられ、(11) の③が生まれたと考える。「打つ」は対象に打撃を与えることで、物を作るのに広く用いられるのに対し、「出す」と結合した「打ち出す」はそれにより、製造の

仕方が限定されている。(12)はこのような例である。

(12) 壁紙があざやかである。金唐紙といって、金属箔を張った和紙に版木棒を押しあて、唐草などの華やかな模様を打ち出す。 (『本の旅人』2005、総記／マスコミ)

それから、抽象領域へ派生した用法は(11)の④である。このとき、「打ち出す」は結果目的語となる「方針、政策、構想、見解、戦略、理念」などの抽象名詞と共に起する。「打つ」の用法として、「先手を打つ」や「政策を打つ」などの表現も成り立つが、「打ち出す」のほうは、「公の場で外界にはっきりと示す」という要素が加わっている。さらに「観客を送る太鼓を打ち出す」(『大辞泉』)が芝居・相撲などで、その日の興行が終わった合図に太鼓を打つことであるように、「太鼓を打つ」の「打つ」と比べ、「打ち出す」の意味はかなり限定され、特殊化されたと言える。

語例2 「打ち返す」

「打ち返す」は語彙的複合動詞「打ち～」のうち、語義の数が多いほうである。『大辞林』(第三版)では、以下の七つが挙げられている。

- (13) ① 打たれた仕返しに相手を打つ。また、射撃し返す。
② 打って相手のほうに返す。
③ 引いた波がまた寄せる。
④ 古い綿を再生する。打ち直す。
⑤ 田畑の土を耕す。
⑥ ひっくり返す。逆にする。ひるがえす。
⑦ 繰り返す。

「打ち返す」の諸用法の全体を見渡すと、⑦を除いてあとはすべて「打つ」の意味用法に関連付けることができる。「ボールを打つ／打ち返す」、「波が打つ／打ち返す」、「古綿を打つ／打ち返す」、「田を打つ／打ち返す」、「寝返りを打つ／寝返りを打ち返す」などの表現が成り立っているように、「打ち返す」の多義性は「打つ」の多義性に近接し、「打つ」の用法に繋がっていると見えた。また、「打つ」と「打ち返す」の多義の代表的な用例を観察したところ、両語はどこまで同じ語と共に起するかについては「返す」の性格によるところが多いとわかった。つまり、「打ち返す」の多義派生は「打つ」の多義構造に基づきながら、「返す」に限定されているのである。

語例3 「打ち込む」

- (14) ① たたいて中に入れる。
② (多く「撃ち込む」と書く) 球・弾丸などを相手の陣に入れる。
③ 刀できりかかる。剣道で、相手に打ちかかる。
④ 精神を集中する。夢中になる。
⑤ 人の弱みを的確に突く。急所を突く。
⑥ 囲碁で、相手の陣の中に、自分の石を置く。
⑦ コンクリートを所定の場所に流し込む。
⑧ 野球やゴルフで、球を打つ練習を十分ににする。
⑨ 財産を使い果たす。
⑩ こみあう。

「打つ」の多義性と関連付ければ、各派生義が分析しうる「打ち出す」と「打ち返す」に対し、「打ち込む」はやや複雑である。「打ち込む」の用法を多彩に発達させている理由の一つが統合的複合動詞「～込む」の多数の用法にあると考える。(14)の①を基本義だとすると、②、③、⑥はそれぞれ特定の場面において用いられる派生義であろう。これらの「打ち込む」はいずれも相手と勝負する際に使用される手段である。また、「コンクリートを打つ」が成り立っているように、「打つ」の用法に関連付ければ、⑦も理解できるのである。文語表現「後に三百余

騎は打ち込みてありけり」(『大辞林』第三版)の「打ち込む」は順序なく入り交ることを描いている。そこから、「打つ」に含んでいる勢いよく行動するという様態がうかがえた。

(15) 自然とともに生き、自然の恵みに感謝して、いきいきと仕事に打ち込んでいる姿が目に焼きついて離れない。(『船の旅』2002年10月号(第14巻第5号、通巻90号))

また、(14)の④は抽象領域へ派生した用法である。(15)のように、仕事に全精力を注ぐの描写している。この意味を表わすとき、「打ち込む」の前には、「学問、研究、趣味、勉強」などの抽象名詞が来る。松田(2004)の「～込む」の意味分類によれば、(14)の④、⑤、⑧、⑨が統合的複合動詞「～込む」の用法と判定されうる。(16a、b)はそれぞれ(14)の⑤、⑧と対応する事例である。このときの「打つ」は「込む」と結合することによって、主体が満足できるような行動を行う意味が生じたと考える。

(16) a. 相手の脇腹にフックを力任せに打ち込む。(『研究社日本語コロケーション辞典』)

b. 毎朝竹刀を100回打ち込んでから朝食を取る。(『研究社日本語コロケーション辞典』)

「手金を打つ」という連語があるように、「打つ」には支弁するという意味がある。(17)の「打つ込む」は所持しているものを徹底的に使ってしまうのを表わす。「支弁」の「打つ」の上位カテゴリー意味は「投擲」である(李 2013: 84)。(17)の「打ち込む」における「打つ」の意味は「打つ」の「投擲」という意味に近いと考える。ある目的達成のため、自分の全財産を投げるように使うプロセスを背景化し、使い果たした結果だけを焦点化した「打ち込む」もやはり、「打つ」の意味用法に関連していると言えよう。

(17) 国会開設の運動に、地所も家も打ち込んで仕舞いなすつた。(『大辞林』第三版)

以上、語例を挙げつつ、語彙的複合動詞「打ち～」の基本義と派生義を考察してみた。語彙的複合動詞「打ち～」の意味は、「打つ」の諸意味に関連付けられるものがほとんどであるとわかった。それに、語彙的複合動詞「打ち～」の前項動詞「打つ」は行為全体を実行する手段であり、後項動詞は行為の動機、もしくは結果の語例が圧倒的に多いとわかった。後項の意味が語全体の主たる意味になるが、「打ち～」と共起する名詞を観察してみれば、「打つ」との関連性が強いことが明らかになった。つまり、語彙的複合動詞「打ち～」の多義は「打つ」の意味、とくに基本義を中心におくことによって体系化できるのである。

以上の考察でわかるように、語彙的複合動詞をなすV1とV2の意味はいずれも全体の意味にたどりつく有力な手掛かりになっている。また、複数の意味が共存した状態にある多義動詞を複合動詞の前項とした場合、後項動詞との組み合わせによって、多義の一部は解消され、基本義に沿った解釈がなされると、複合動詞の意味は多くの場合分析できることが明らかになった。今回は「打ち～」に限定した検討であり、他の多義語を複合動詞の前項動詞とした場合も、同様の結果が認められるかどうか検討を追加する必要がある。

3-3. 一語化した「打ち～」

一語化した複合動詞とは、V1とV2で構成される複合動詞というより、一語として固定化していると認識されるものである。代表的な語例には、「落ち着く」、「思い出す」、「折り入る」などがある。靱山(2002)では合成語の意味は、一般に、単に構成要素の意味を合わせたものでもなければ、構成要素の意味と全く関係ないのでもなく、構成要素の意味を基盤として、さらに意味が限定されたものと考えることができると指摘している(2002: 56)。前節の分析からもわかったように、語彙的複合動詞の場合は、V1とV2はいずれも合成語の全体の意味に対して貢献が認められる。一見、V1とV2に分けて分析不可能の一語化したものはいったいどのような性格を持っているのであろうか。この節では「打ち合わせる」と「打ち解ける」の二例で一語化した「打ち～」の意味を検討してみる。

「打ち合わせる」は、まず、(18a)のように、物と物をぶつける行為を描くことができる。また、「火打ち石／拍子木／シンバル／着物の前を打ち合わせる」などの表現も成り立つ。『大辞林』や『明鏡国語辞典』などはこれを第一義（基本義）としている。それに対して、『岩波国語辞典』では(18b)のような前もって相談するという意味は現代語としてもっとも普通に用いられていると扱われ、先に並べられている。(18b)の「打ち合わせる」は一見、「打つ」とは全く関係がなく、表面的に見たのでは説明が難しい。しかし、「手を打つ」には「合意する」という意味が含まれている（李 2013:85）ように、正式な商談を行うに当たり、双方がぶつけ合い、合意に至るまで検討することを表す「打ち合わせる」にはやはり、「打つ」の意味がかすかに潜んでいる。このように、「打つ」の用法を介して(18b)の「打ち合わせる」を解釈することも可能であり、無理なく繋がるように思われる。ゆえに、一語化したものとはいえ、本動詞の用法に還元すれば、分析できるのである。

(18) a. たとえカムチャツカへやられたって、防寒手袋さえもらえば、ばんばんと両手を打ち合わせて、斧をひっかついで、新しい小屋を建てる木を伐り出しに出かけますよ。

（世界の文学セレクション 36 (11) 1994）

b. また、資料等の準備が必要な場合には予め打ち合わせておくぐらいの配慮が必要です。（『銀行と上手くつきあう法』2000）

次に、「打ち解ける」の検討に移る。(19)の「打ち解ける」が「打ち」の接頭辞の用法と判定する辞書（『学研国語大辞典』など）もあるが、警戒心や遠慮が消え、心の隔たりがなくなり、相手と親しくなる意味を表わす際には、二つの語から組み合わせたものというより、むしろ一語化したもののように思える。この意味に至った道筋を考えると、「打つ」の「対象に打撃を与えて、変形させたり、移動させたりする」という意味要素が利用されていることに気付く。二人の間に存在する心の隔たりが壁のようなもので、それを打つように倒したり、壊したりすれば、二人の関係が良くなる。もちろん、それを実現するためには、物理的な「打つ」行為は行わない。「打つ」のメタファー的な意味が「打ち解ける」に含まれていると考える。

(19) 子どもが気おくれせずに教室に入れるように、仲間に打ち解けられるように、教師に協力してもらうためには、親のほうから密に連絡をすることが必要です。

（『思春期のこころの病気』2002）

このように、一語化したものと思われる「打ち合わせる」と「打ち解ける」はいずれも「打つ」の意味用法と関連付ければ、分析できるし、打つ経験に基づいたメタファー的な用法であると言えよう。

4. まとめ

本稿では、「打つ」の諸用法を整理したうえ、複合動詞「打ち～」の意味用法の記述を試みた。接頭辞「打ち」の多様な意味は、「打つ」の意味に関連性を持っていつつ、結合する動詞の意味の差異によって導かれるのだとわかった。また、語彙的複合動詞「打ち～」の基本義と派生義の考察を通して、多義動詞を複合動詞の前項とした場合、後項動詞との組み合わせによって、多義の一部は解消され、基本義に沿った解釈がなされると、それらの意味は多くの場合分析できることが明らかになった。さらに、一见、「打つ」の意味と全く関係がない一語化したものも、「打つ」とV2の意味を基盤として、さらに意味が限定されたものであると考えられる。このように、接頭辞の用法であれ、語彙複合動詞であれ、一語化したものであれ、本動詞「打つ」の意味が生きていると分かった。つまり、単純動詞から複合動詞への意味の連続性があるということである。

注

- 1) 本研究で利用したコーパスは国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」NINJAL-LWP for BCCWJ (検索サイト <http://nlb.ninjal.ac.jp/>) と少納言 (検索サイト <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>) である。
- 2) 接頭辞的な表現や文語のような現代日本語としてあまり使われていないものも含まれている。
- 3) 「複合動詞レキシコン」は国立国語研究所が開発した複合動詞に関するデータベースである。詳しくは検索サイト <http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/> を参照。
- 4) 石井 (2007) によると、「過程結果構造」が複合動詞の基本的な語構造であり、「語彙接頭辞構造」もそこから派生されたものであるとのことである。
- 5) 現代日本語として一般的に使われている語彙的複合動詞を表 2 にまとめた。また、語彙複合動詞であるとともに、接頭辞的な用法も混ざっている語例があるが、必要に応じてその用法を選出することとする。
- 6) 「撃ち出す」とも書く。

参考辞書

北原保雄編 (2002) 『明鏡国語辞典』大修館書店
金田一春彦・池田弥三郎編 (1980) 『学研国語大辞典 (机上版)』学習研究社
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (1986) 『岩波国語辞典第 4 版』岩波書店
姫野昌子監修 (2012) 『研究社日本語コロケーション辞典』研究社
松村明編 (2006) 『大辞林第三版』三省堂
松村明監修 (1995) 『大辞泉』小学館

参考文献

石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
影山太郎 (1993) 『文法と語構成』ひつじ書房
柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進 (2002) 「ナグル・ブツ・タタク・ハタク・ウツ」
『ことばの意味 1 辞書に書いてないこと』183-191 平凡社ライブラリー
鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』くろしお出版
板東美智子 (2009) 「打撃動詞の多義性—活動表現の「打つ」と感情表現の「打つ」—」
由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』159-174 くろしお出版
姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通じて』
ひつじ書房
松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114 : 37-83
榎山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』研究社
由本陽子 (2005a) 「複合動詞の統語素性—日本語の語彙的複合動詞における下位範疇化素
性を中心に—」大石強・西原哲雄・豊島庸二 (編) 『現代形態論の潮流』135-154 くろしお
出版

由本陽子 (2005b) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房
李淼 (2013) 「中国語の“打 (da)”と「打つ」の意味分析—学習者の母語を考慮した語彙
教育のために—」『城西国際大学大学院紀要 日本言語文化研究』2 : 65-87

付記

本論文は、2013 年度大連外国語大学科研基金青年項目、課題番号 (2013XJQN29) 「認知語義学視域下的日语多义动词研究」(代表 李淼) の研究成果の一部である。